

学内キャンプ実習のカリキュラム開発と効果について

—大学生を対象にした特別活動の試み—

Curriculum Development and Effect of Camp Training in Campus

- Attempt of Special Activities for University Students -

久永 哲雄 TETSUO HISANAGA

崔 玉芬 YUFEN CUI

高瀬 博 HIROSHI TAKASE

竹澤 稔裕 TOSHIHIRO TAKEZAWA

窪田 友樹 YUKI KUBOTA

Abstract

This study examined the educational effect of camp training in universities for understanding the significance of special activities and building up relationships. Survey method included image and consciousness survey that were conducted on 25 university students who participated before and after camp training as well as on fundamental strength as social workers. Result was, (1) all the students who had anxious feelings before the camp training Recovered their feelings after the training. (2) Even with camp training in campus, except for one student, most students Recovered of training's purpose. (3) It has become clear that the characteristic curriculum "implementing plan creating manual", "Learning the dangers of the sea, mountain, and river", "Post orienteering in campus" which was developed for camping in the university, is effective as learning material. (4) About the image of the camp, the good image increased by 10 points after camping implementation, exceeding 90% on average, while confidence as a leader fell by 12 points. (5) Fundamental strength as social workers (composed of "the ability to step forward", "the ability to work in a team" and "the ability to think out") increased by 80% and 20% had no change.

From the above, it can be inferred that even with camp training in campus, by cooperated acting, the building up of human relations will improve. Therefore, it is desirable that camp training in campus should be considered in university as a useful educational method that can achieve objectives of special activities without stopping the camp due to unseasonable weather or unforeseen circumstances.

キーワード

キャンプ実習=Practical Training Camps

社会人基礎力=Fundamental Competencies for Working Persons

前に踏み出す力=Action

チームで働く力=Teamwork

考え抜く力=Thinking

I. はじめに

現代日本は核家族化や少子化に伴い、家庭教育力が低下し、人間関係を学ぶチャンスを奪われており、親の過保護や過干渉がさらに拍車をかけている。加澤(2009)³⁾は、家庭環境の変化で弱体化したり失われたりしたものとして①人間関係力の衰退②倫理観の欠如③社会性の未発達④自主自立精神の発達の遅れ⑤他社への配慮心の欠如⑥基本的生活習慣の未形成等を指摘し、さらに、これらの種々の力を家庭教育から学校教育の役割として、特別活動の重要性を訴えている。

また、学習指導要領の改訂(2008)²⁾³⁾により、21世紀は「知識基盤社会」の時代であり、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ、すべての領域で飛躍的に重要性が増すとされている。また、一方OECDのPISA調査などの各種調査から、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があることや、家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣、生活習慣に課題があるとしている。そのような状況分析において、教育現場では学習指導要領の改訂を受け、教育委員会の指導の下、各学校は授業時間の確保や授業の質の向上が問題視され、その改革に躍起になり始めた。高旗等(2012)⁴⁾も指摘しておるように、授業時間を確保するためにまず取り組んだことが、行事の精選という名のもとに、特別活動の時間が削られたのである。特別活動改訂の趣旨としては、「特別活動と道徳、総合的な学習の時間のそれぞれの役割を明確にし、望ましい集団活動や体験的な活動を通して、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性の育成を図るといふ特別活動の特質を踏まえ、特により良い人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治能力の育成を重視する。」と学習指導要領に明記されている。そのような背景から、現場では道徳の時間と総合的な学習の時間について、その評価方法や評価基準にまで研究開発が進んでいるが、一方その他の特別活動の領域については、逆に削減・軽視されはじめていることに多くの教育者が危惧しだしている。

学校現場の教育者は、「生きる力」「望ましい人間関係の形成」は特別活動を通して育むべきであるとし、特別活動と人間形成の重要性について山口ら(2015)⁵⁾や多くの研究者の論文や報告が存在している。

一方野外活動領域の研究は、数多く存在している。針ヶ谷ら(2006)⁶⁾は、キャンプの国際比較の中で日本のキャンプの「学び」のねらい、目的のカテゴリーを①知識や情報(自然や生態系について、学校での学習関連、地理、農作技術など)②感情や価値観(態度や価値観、自己認識アイデンティティ、自信、自然と社会の関係、自然の価値や親しみ、家族への態度、未来への志向、生きる力など)③対人的な能力の開発(コミュニケーション技術、リーダーシップ、チームワーク、異文化理解など)④身体的な技術(体力、野外活動技術)⑤社会的な行動力(社会的な行動、持続可能な社会への貢献)と分析分類した。また、研究者も上記のような分類の中で、環境教育や自然教育の効果についての研究(岡島ら、2006)⁷⁾(田中ら2006)⁸⁾や発達段階に応じたキャンプの効果(向後、2010)⁹⁾、教員系大学の学生を対象とした研究(西島、加藤、田井ら)¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾等数多く報告され、キャンプ実習が学校教育の領域である特別活動(学校行事)で養うべき力の育成に有効であるという効果検証がなされている。

著者が勤務していた中高の学校では、飯盒炊飯等を含んだ野外活動教育の指導ができる教員が皆無であったことから、教員自身の自然体験の減少が子供たちの自然体験の減少

につながっていると危惧すると共に、多くの目的や課題に対応すべく、集団宿泊行事や遠足等の学校行事を企画運営できる能力を備えた若手教員の育成は、次世代教育を担う人材育成という使命ある大学教育の重要な目的と考える。

II. 研究の目的

そこで、本研究は学校教育や社会教育者の養成を目的とした大学のキャンププログラムの開発とその効果について検討する。また従来、自然の中でのキャンプ実習の効果については、多くの研究者が報告している。しかし、学校現場では「台風」や天候不順による行事中止の判断は、学校のリスクマネジメントから致し方ないのであるが、二年連続中止ともなれば学校教育の中での教育の機会を失うことになる。現場での教員の異動の激しさからも行事の実施や指導技術の継承を困難とし、現場ではあっという間にキャンプ実習等の高度な指導技術が必要な教育ツールを失うのである。

そこで、本研究は学校の中で行える、キャンプ実習の宿泊体験活動のプログラム開発やその効果の検証を行い、学校現場の効果的で継続可能な教育活動の提案を行うことを目的とした。また、学内でのキャンプ実習が大学生の人間関係の構築やコミュニケーション能力にどのような影響を及ぼすか、さらに、指導者としての自覚や社会人基礎力にどのような効果があるかを調査すると共に、キャンプ実習の意識やイメージの変化が、社会人基礎力の変化とどのように関わっているかを検証した。

III. 研究方法

1) 調査時期・場所

2016年8月23~24日の1泊2日の日程で、同大学学内研修施設であるコンピテンシーハウスと同大学敷地内施設において実習は展開された。また、実習前には学内で三日間の事前学習を目的とした講義や実習が行われた。

2) 対象

本研究は関東学園大学経営学科スポーツマネジメント授業科目のレクリエーション・キャンプ実習を履修し、事前学習とキャンプ実習に参加した経営学科、経済学科の学生(1年生~4年生の男子18名、女子17名:うち留学生6名を含む)学生35名を対象にし、回答を得られた合計25名(男子15名、女子10名)について検討した。

3) 調査内容

1. アンケート作成については、実際の自然環境の豊富なキャンプ実習と学内キャンプとの差異を計ることを目的としたため、西島(2009)の評価項目を一部参考に改編して作成した。

アンケート内容は、対象者の特徴、経験①キャンプでの不安、②キャンプの目的、③キャンプで学びたいこと学べたこと、④キャンプのイメージ、⑤指導者としてのキャンプのイメージを共通項目として事前アンケート事後アンケートの作成を行った。イメージについてはイメージの低さ、高さを四段階として調査した。また、事後アンケートにおいて、⑥キャンプを終えて気持ちが変わった点、⑦キャンプに参加して困った点、⑧キャンプに参加して特に良かった内面の気づき、⑨特に印象に残った点を調査した。

2. 職場や地域社会の中で多くの人々と接触しながら仕事をしていくために必要な能力「社会人基礎力」経済産業省(2009)¹³⁾尺度がどのように変化するかを測定した。なお、自己診断シートを活用し、より本人が能力開発を自覚できるようにした。

社会人基礎力は、評価項目の①主体性(物事に進んで取り組む力)、②働きかける力(他人に働きかけ巻き込む力)、③実行力(目的を設定し確実に行動する力)の三項目を「前に踏み出す力」として、④課題発見力(現状を分析し目的や課題を明らかにする)、⑤計画力(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)、⑥創造力(新しい価値を生み出す力)の三項目を「考え抜く力」として、⑦発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)、⑧傾聴力(相手の意見を丁寧に聴く力)、⑨柔軟性(意見の違いや立場を理解する力)、⑩状況把握力(自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力)、⑪規律性(社会のルールや人との約束を守る力)、⑫ストレスコントロール力(ストレスの発生源に対応する力)の六項目を「チームで働く力」として内容やガイドライン文を提示して解答させた。また、自己評価ランクは5段階としてスコア分析を行った。

上記の社会人基礎力の尺度は信頼性と妥当性が確認されており、一般的に大学生対象に、キャリア教育の一環としても扱われている知名度が高い尺度である。

4) 調査手続き

調査対象者については授業内で実施された。回答は無記名で行われた。調査対象者が答えたくない場合には、答えなくてもよいこと、そのことで個人に不利益が生じないことを伝え、さらに、回答が他人に知られることはないことを保証した。

5) 授業計画

学内キャンプ実習は事前授業と1泊2日の宿泊体験での各種アクティビティープログラムと生活体験を中心に授業計画を作成し実施した。

アクティビティープログラム

1. 野外炊飯、①カレーライス、②スパゲッティー、③飯盒炊飯 2回、2. 室内炊飯①BBQ(鉄板焼き)、焼きそば、サラダ、3. 「海山川の危険」学習、4. キャンドルサービス(体育館)・スタンプ練習・歌練習、5. ポストオリエンテーリングの学習・準備・実施、6. テント設営撤収学習

表1 授業計画

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目				集合 開村式 海山川の危険		昼食(飯盒炊飯) カレーライス		テント等設営撤収		ポストオリエンテーリング学習・準備		夕食(屋内) 焼肉		キャンドルサービス		入浴自由 時間	消灯
2日目	起床	朝食(飯盒炊飯) 納豆・卵料理等		ポストオリエンテーリング実施		昼食 スパゲッティ		片づけ	清掃・撤収		表彰式 キャンプ 村閉村式	解散(17時)					

6) 教材開発

1. カリキュラム作成:(天候不順や不測な事態用前期15時間授業計画)と授業計画(表1)
2. 実施計画作成マニュアルの作成:(学校教育や社会教育でキャンプ実習を計画できるマニュアルの作成)、①実施要項の作成、②持ち物チェックリスト、③オプションアクティビティー装備チェックリスト、④注意事項、⑤学校装備点検リスト、⑥組織図、⑦役割分担表、⑦アクティビティーリーダーの役割、⑧食事係分担、⑨献立・食材・食事班分担、⑩開村式・閉村式セレモニー次第、⑪キャンプファイヤー(キャンドルサービス)進行次第等、⑫ポストオリエンテーリング実施要項、⑬事前課題集(自然観察・気象天体・スタンプ等)⑭その他
3. 「海山川での危険を学ぶ」テキストの作成:(これにより自然現象の科学的な知見や災害や事故を未然に防げる知識を学べるテキスト作成)
4. 学内ポストオリエンテーリング:(校舎内の構造及び敷地内の植物・造作物に興味・関心を持たせて、宝探しイベント等の計画・立案・運営ができる能力を身に付ける)

IV. 結果と考察

1、キャンプ実習事前アンケート調査結果

1) キャンプ体験について

まず事前アンケート調査対象者に宿泊型のキャンプ実習の経験回数の質問を行ったところ、宿泊型のキャンプ実習が4回以上の学生と初めてであった学生の割合が多かった。(図1-1)。また、その経験の時期を問うと(図1-2)のように小学校時代が最も多く、次に中学校時代であった。就学前と大学時代は同等の結果であった。小学校、中学校の時期でのキャンプ体験の機会が多く、その時期での教育活動が多くされているようである。また、キャンプ体験がない28%の学生のコミュニケーション能力等についての研究が必要であると考えられる。

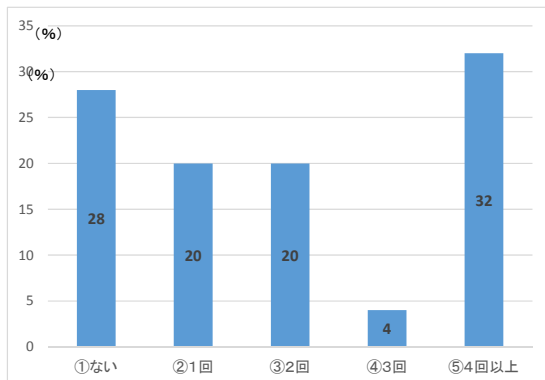


図1: 宿泊型のキャンプ経験数

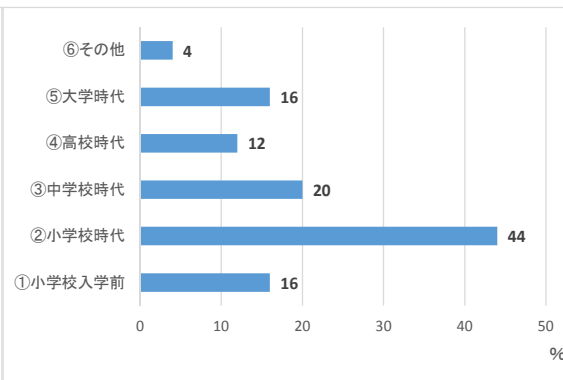


図2: キャンプを経験した年代

2) キャンプへの不安

学生のキャンプ実習に参加する以前の不安度を図2に4段階で示した。全く不安がないが52%で、不安を抱えて参加した学生の合計が48%であった。この不安がキャンプ経験と関係があるかを、分析した結果、なんらかの不安を抱えていた学生で全くキャンプ経験がない者が4名、2回以上のキャンプ経験者が7名であり、不安の原因は別のところに存在するようにも伺われた。また、一方不安が全くない学生52%のキャンプ経験者は8名であり、未経験は3名であり、経験者が占める割合が多く関係性を示していた。

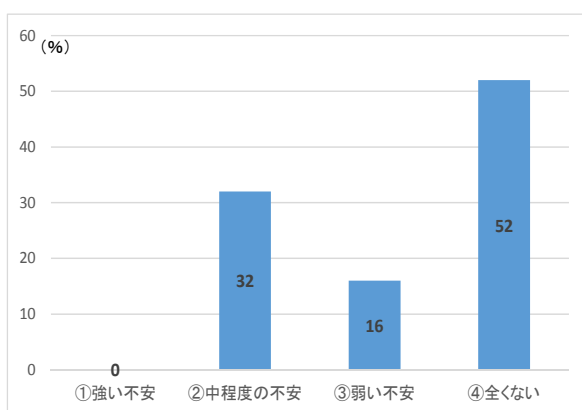


図3: キャンプで不安に感じた程度

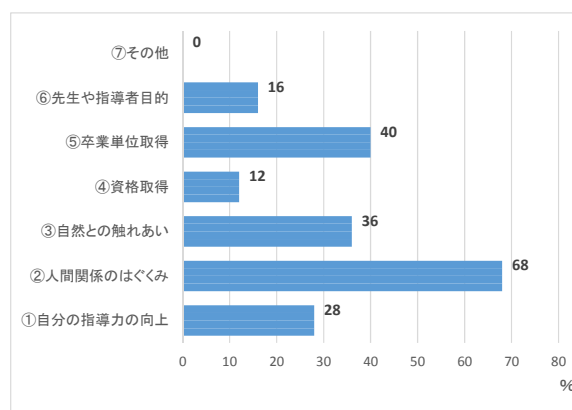


図4: キャンプの目的(実習前)

3) キャンプの目的意識

次に図3に示したように、キャンプの目的を他者との関わりか、自分の内面との関わりかを分析すると、人間関係のはぐくみをキャンプの目的としている学生が68%で、卒業単位取得が40%、自然とのふれあい36%、自分の指導力向上28%となり、他者との関わりをキャンプ実習の目的として重要視していることがわかった。

4) キャンプに対するイメージ

実習前のイメージを図5に示した。全体平均では74.2%の者が良好なイメージを持っており、協力、スタッフ能力のイメージが多く他者との関わりをここでも重要視していることが伺われる。大変そうであるという不安なイメージも多いことや自然体験、子どもの指導技術にもネガティブなイメージが表れた。また、図6の指導者としてキャンプのイメージを聞いた結果、キャンプへの気持ち、指導者としての自信、指導力向上が多く、興味や意欲を表す項目が強く表れていた。また、指導者としては楽しそうと思わない者が40%おり、キャンプに対する参加者としての思いと指導的な役割にたったときの大変さを強く感じ責任感の表れであると考えられる。

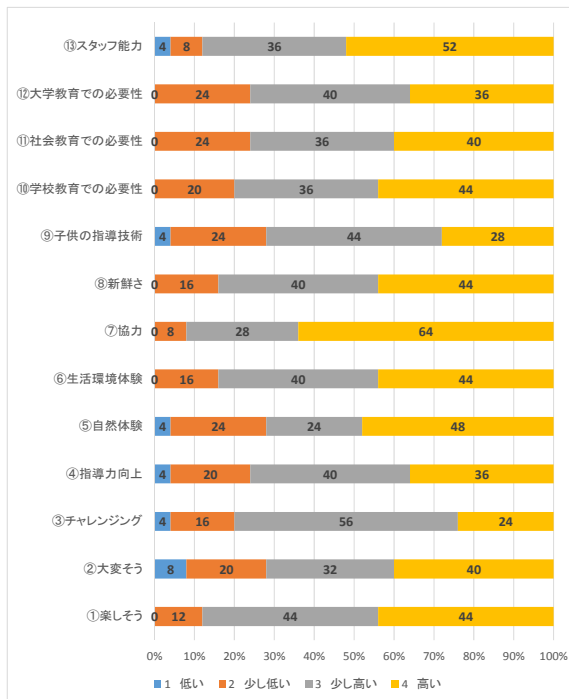


図5: キャンプに対するイメージ

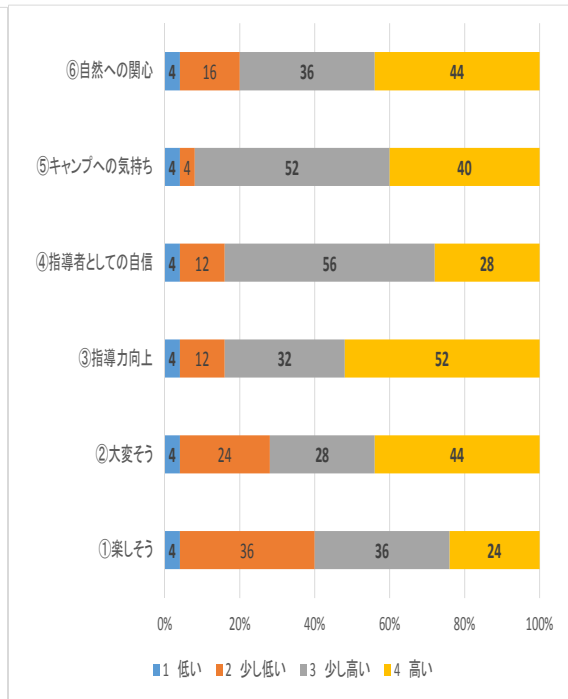


図6: 指導者としてのキャンプのイメージ

2、キャンプ実習事後アンケート調査結果

1) キャンプ実習の不安についての変化

図7によれば不安を抱えて参加した学生48%が全て、不安を忘れていた、不安を克服したという回答であった。また、全く不安はないとキャンプ実習前に答えていた者の3名(12%)が不安を解消したと答えており、なんらかの不安を抱えて参加していた者がさらに多かったことが伺われた。キャンプ実習の不安が何であったのか、また、どのようなストレスが強かったのか心理的な尺度を使った研究が必要であると考えられる。

2) キャンプの目的意識の変化

目的達成についての意識を4段階で図8に示した。達成できたとする者が96%で、自然体験の少ない学内キャンプ実習での効果が高いことが解った。また、まあまあ達成できたとする学生が多かったのは、本番の2泊3日での実施計画が台風で延期短縮され、現地でのキャンプの期待が削がれた形での学内キャンプであったことに起因すると考えられる。

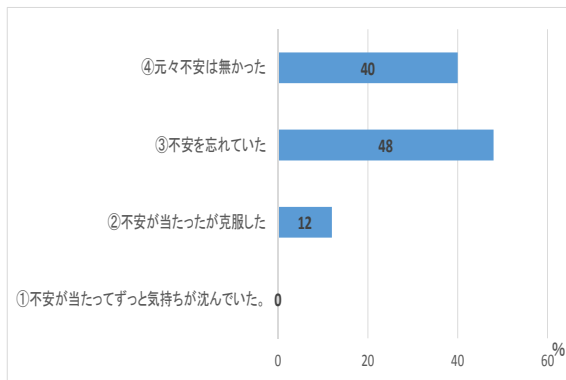


図7: キャンプ後の不安だった気持ち

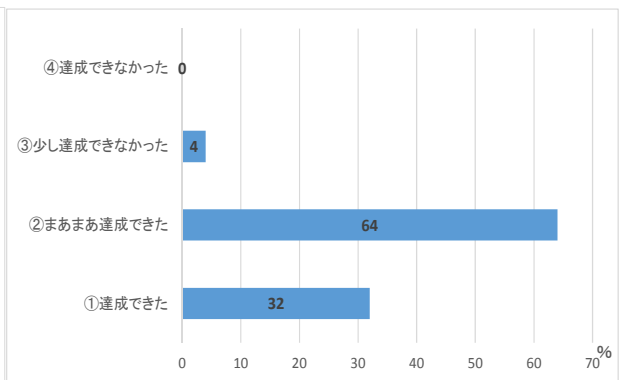


図8: キャンプの目的達成について

また、図9に示した目的で達成できたことの調査項目では、84%の者が人間関係のはぐくみを上げており、特別活動の意義の理解や効果について検証できた。

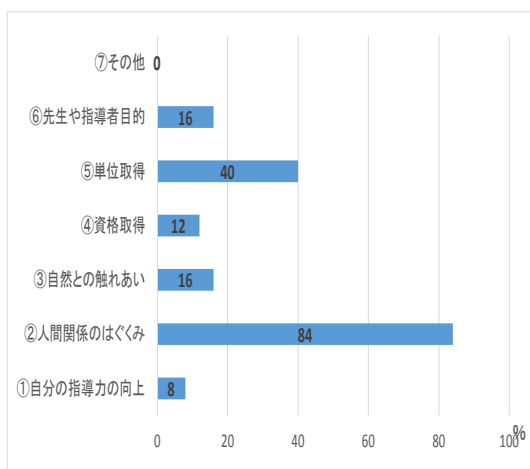


図9: キャンプで達成されたこと

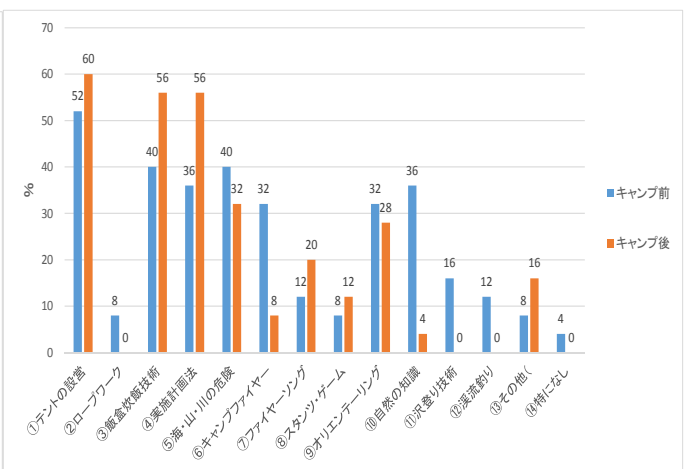


図10: キャンプ実習で良く学べたアクティビティー

3) キャンプ実習で十分に学べたこと

図10に示した14項目のうち、アクティビティープログラムの中では、テントの設置・飯盒炊飯という知識・技能についてと、海山川の危険、ポストオリエンテーリングがあげられていた。また、事前学習で取り扱った、指導者としての能力を身に付ける実施計画作成法について大半の学生が学べたとしており、キャンプ実習当日のプログラムの中でも、慎重な計画・用意周到な準備・大胆な実施の3要素をポストオリエンテーリングで実体験できたことも良かったと考える。さらに、教室を使った海山川の危険講義は、自然の中での環境とは違い、集中力や黒板、資料等の多くの良い環境が整っており、学習効果の向上に寄与したと推測された。

4) キャンプのイメージの変化

実施後のキャンプのイメージを図11に示した。学内キャンプ実習が達成不十分なところは、図にも表れているように唯一自然体験を満足させることはできなかった。また、自然体験が大きくイメージが下がったにも関わらず、全体平均のイメージは74.2%で変化がなく、学内キャンプ実習でもキャンプに対する期待と概ね変化がないことがわかった。また、図13の変化比較からキャンプのイメージとしてアンケート前後で一番高い数値であったのは、「協力」であり、人間関係力の育成に高い効果があると考えられた。また、図12図14の指導者としてのイメージは、大変そう、楽しそうが大きく減少し、指導者としての自信も低下した。このことは、教職課程を履修している者が多く参加したため、指導者としての役割、責務を感じた結果と考える。

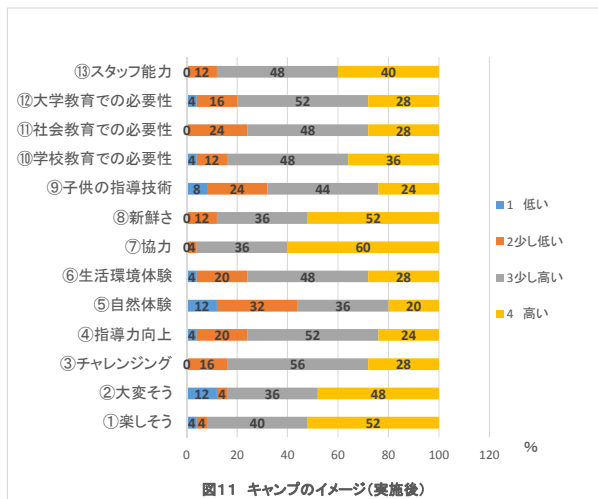


図11: キャンプのイメージ(実施後)

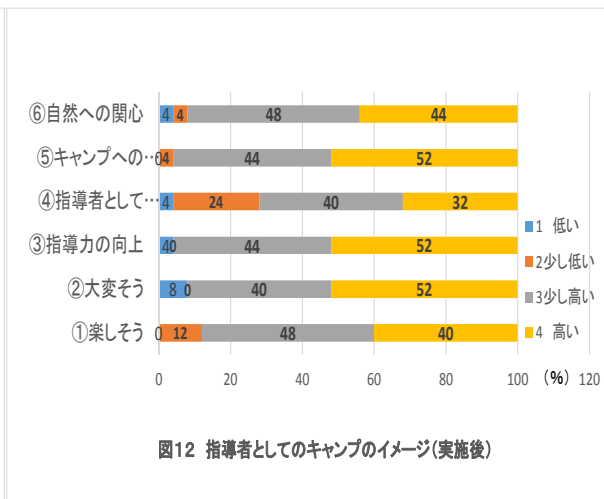


図12: 指導者としてのキャンプのイメージ(実施後)

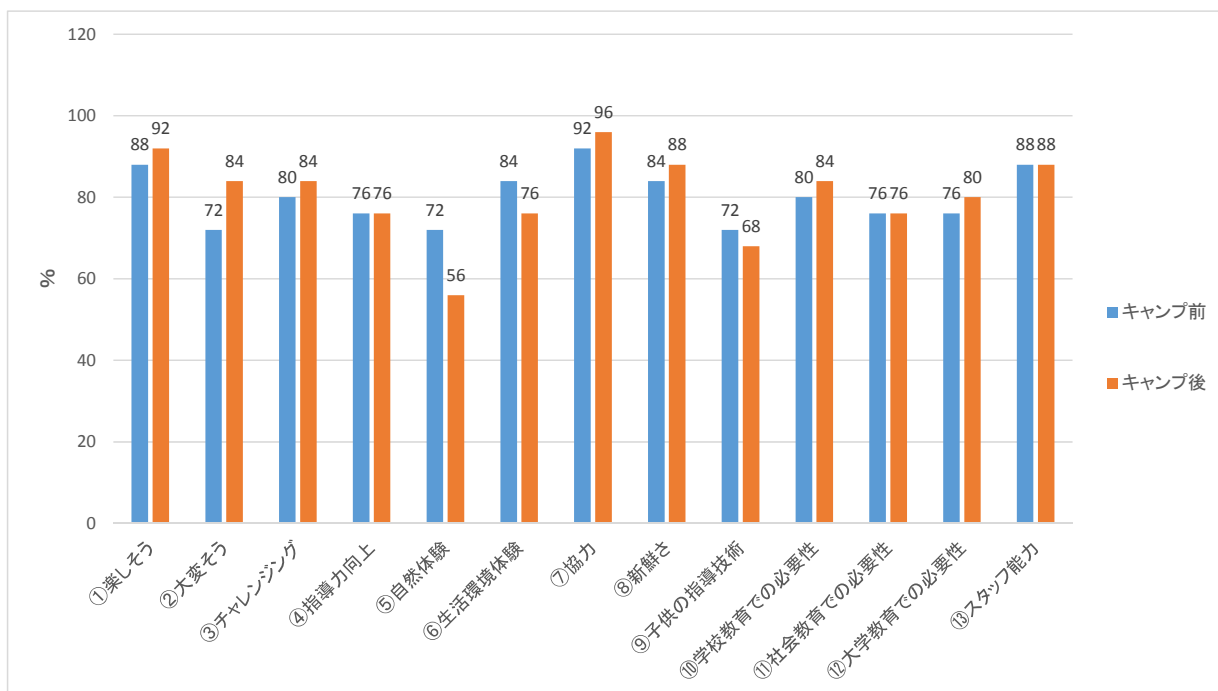


図13: キャンプの良いイメージの変化

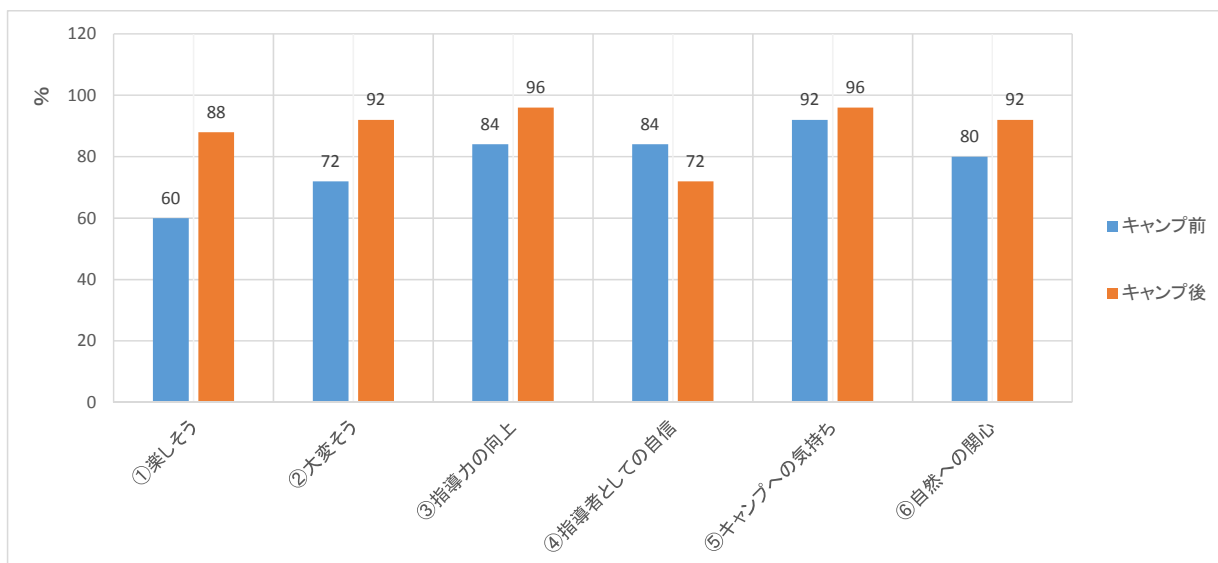


図14: 指導者としてのキャンプのイメージ

5) キャンプ後の心境の変化

キャンプを終えて、気持ちが変わったところを図15に示した。特に④友達との仲間意識が高まった(50%)、⑤新しい友人関係ができたとした学生(54%)が半数を超えており、⑥友人のリーダーシップや実行力等に刺激を受けたとする、他者との人間関係を示唆する3項目が突出して高かった。さらに、②これまで以上にキャンプへ行きたい気持ちが高まった(52%)、③キャンプの指導法をもっと勉強したいと思った(32%)の項目が多く、学内キャンプ実習での効果が高いことを示唆した。

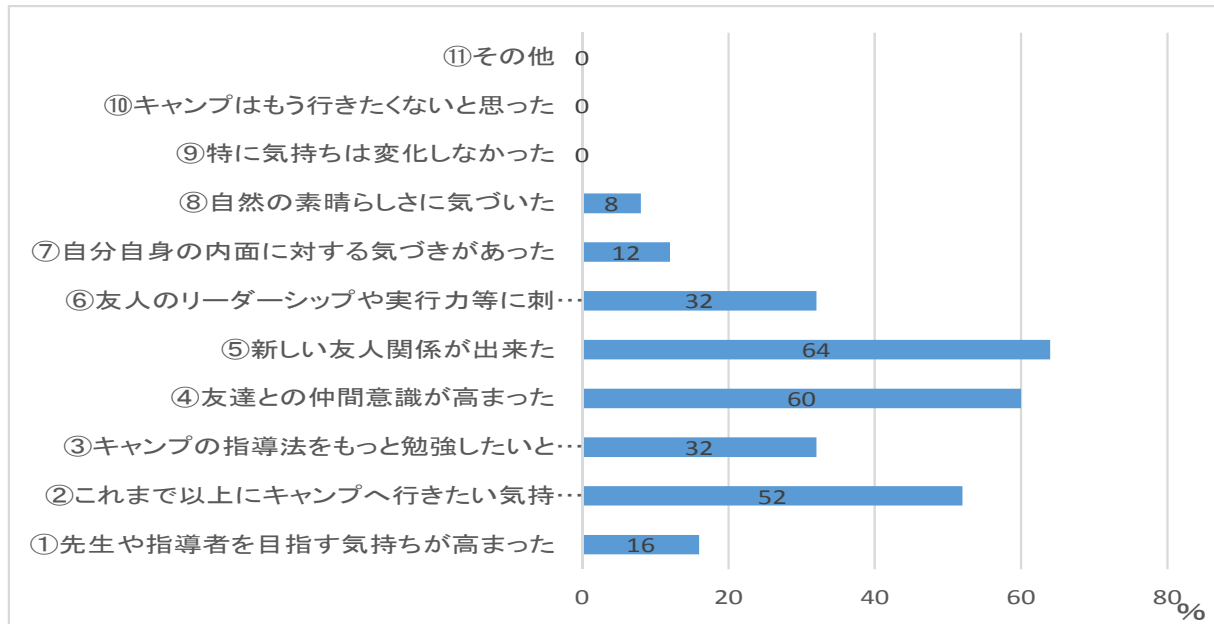


図15: キャンプを終えて変わった気持ち

また、図16に示したキャンプに参加して困ったことについての分析は、「気持ちは特に変化しなかった」が48%であることは、逆を言えば、体調不良・健康の問題、キャンプに対する価値観、仲間とのコミュニケーション等に課題や疑問が生じていたという結果であり、その少数の課題や疑問を見落とさないことが学校現場では重要である。

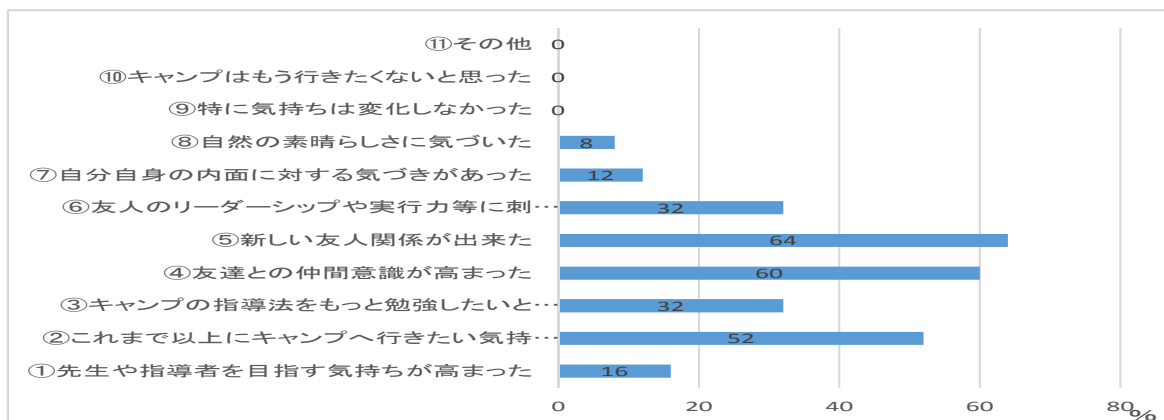


図16: キャンプに参加して困ったこと

6) キャンプ実習で良かった点や印象に残った点

キャンプ実習で良かった点を図17、印象に残った点を図18に示した。記述式であったために未記入が多かったが、良かったと記述した内容は、全てが他者との関わりについてであった。また、特に印象に残った点は、体育館で実施したキャンドルサービス、食事、ポストオリ

エンターリングや他者とのコミュニケーションを挙げていた。このことは、各種アクティビティプログラムの効果の高さを示していた。

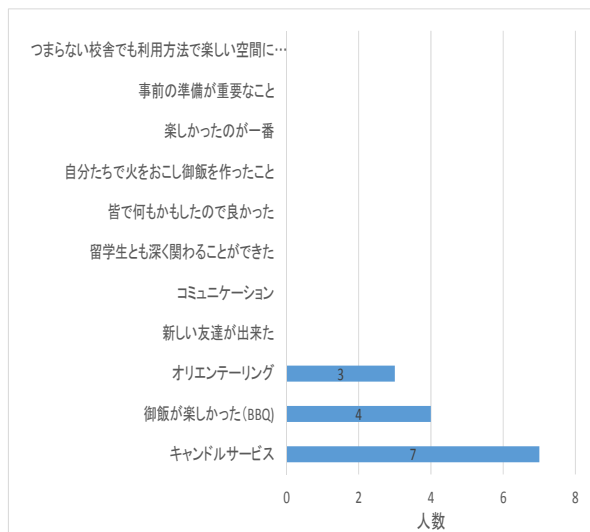


図17: 今回のキャンプで印象に残ったこと

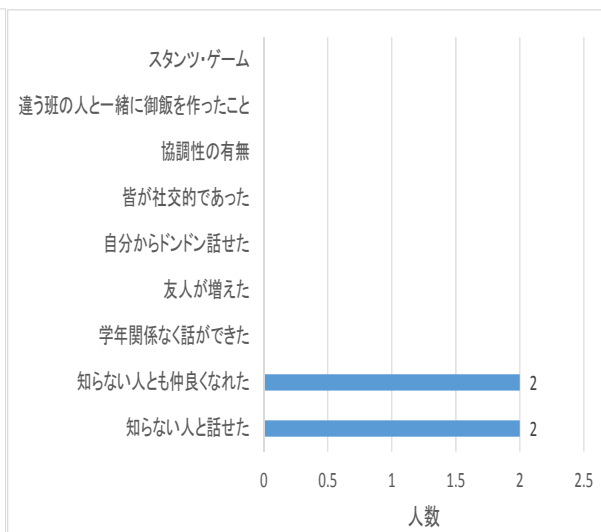


図18: 良かった具体例

7) キャンプに参加しての反省すべき点やキャンプでの不安な気持ちの変化

図19に示した、キャンプに参加しての反省すべき点は、9割近くがないと答えており、あると答えた理由は、虫対策の準備不足やキャンプに参加する前の自己の心持ちについての反省点であった。また、図20に示したキャンプ前の不安な気持ちの変化は、不安な気持ちを抱えていた学生48%の全員が改善されたとの結果が

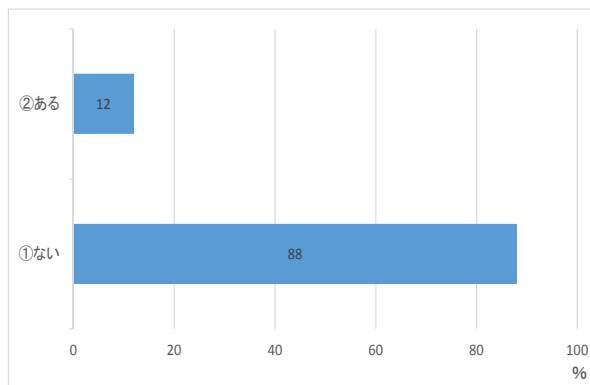


図19: キャンプに参加して反省すべき点の有無

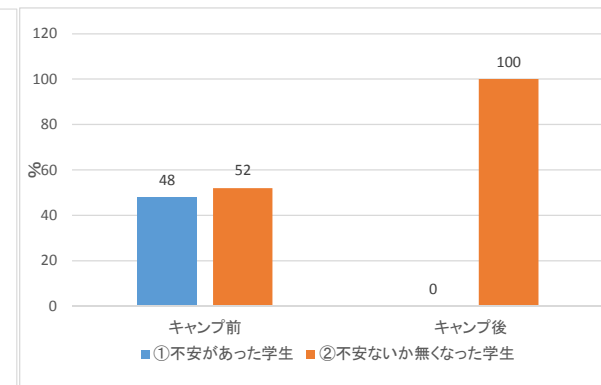


図20: キャンプ前に不安だった気持ちの変化

3. 社会人基礎力調査結果

1泊2日のキャンプ実習での調査であったためか、大きな変化は見受けられないものの、評価項目の3要素である、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の変化について学内キャンプ実習前と後を比較し、その変更得点を求め分析した。各図の棒グラフの高さは、変更得点の人数を表している。

1) 前に踏み出す力

図21は、前に踏み出す力を図示したものである。前に踏み出す力は、主体性(指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力)、働きかけ(「やろうじゃない

か」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かす力)、実行力(言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む力)の3評価項目で構成されている。得点範囲3~5,最低得点実施前4 実施後3,最高得点実施前13 実施後14であった。

前に踏み出す力(得点範囲3~15,最低得点実施前4 実施後3,最高得点実施前13 実施後14)

変化がない人が14名と最多であったが、10名が変更得点を向上させた。また、下降したのが1名であったことは全体の積極性が伺われた。キャンプ実習では、周りの人を動かすリーダー的な存在がアンケート結果からも現れており、積極的に取り組み影響力を持っていた人物が多かったことと一致した。特に飯盒炊飯を含む食事作りや班別対抗で行われたポストオリエンテーリングは積極性や周囲を巻き込むようなリーダーシップや決断力が求められることから、上昇したとも考えられる。

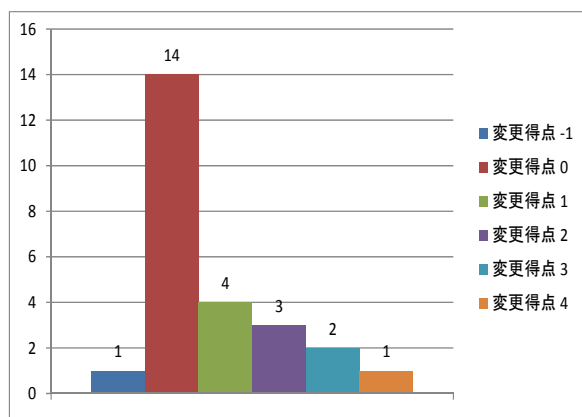


図21: 前に踏み出す力変更得点及び人数

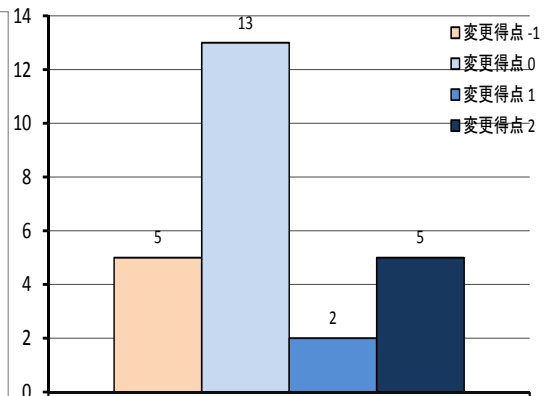


図22: 考え抜く力の変更得点及び人数

2) 考え抜く力

図22は、考え抜く力を図示したものである。考え抜く力は、課題発見力(目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する力)、計画力(課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善なものは何か」を検討し、準備する力)、創造力(既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。の3評価項目で構成されている。得点範囲3~15,最低得点実施前3 実施後4,最高得点実施前12 実施後12であった。

変更得点が向上した学生が少なかったのは、キャンプ実習の内容のプログラムには考え抜く内容のものが少なかったからであろう。ポストオリエンテーリングの一部はあるが、時間制限があるために、協同、推測、体力勝負の要素が強く、考え抜く力を使う場面が少なくなったのであろう。

3) チームで働く力

図23は、チームで働く力を図示したものである。チームで働く力は、発信力(自分の意見を解り易く整理した上で、相手に理解してもらえるように的確に伝える力)、傾聴力(相手の話しやすい環境を作り、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す力)、柔軟性(自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する力)、状況把握力(チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する力)、規律性(状況に応じて、社会のルールに沿って自らの発言や行動を適切に律する力)、ストレスコントロール力(ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の

力を抜いて対応する力)6項目で構成されている。得点範囲 6~30、最低得点実施前 15 実施後 17、最高得点実施前 26、実施後 28 であった。

チームで働く力(得点範囲 6~30、最低得点実施前 15 実施後 17、最高得点実施前 26 実施後 28)

社会人基礎力の評価項目で、変更得点を向上させている値が一番大きかったのが、チームで働く力であった。アンケート結果のキャンプのイメージでも一番高かったのが「協力」であり共通した結果であった。このことこそが、キャンプ実習のワーキングプログラムの効果であると考えられる。

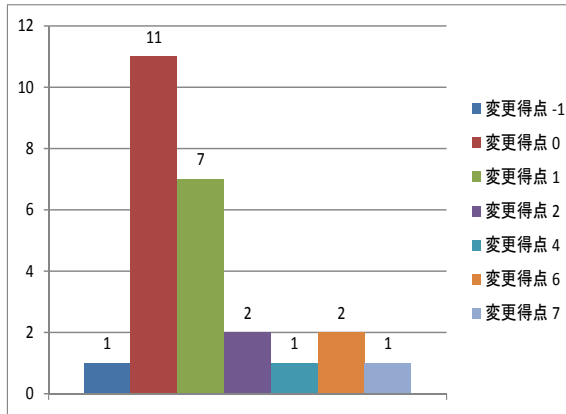


図23: チームで働く力変更得点及び人数

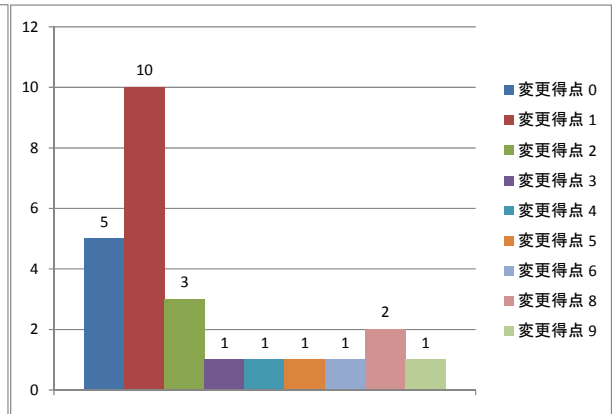


図24: 社会人基礎力変更得点人数及び人数

4) 社会人基礎力変更得点

社会人基礎力のトータルな変更得点を図 24 に示した。得点範囲は 12~60、最低得点実施前 29 実施後 29、最高得点実施前 48 実施後 51 であった。変更得点 0 の変わらない学生が、20%であり、向上した学生が 80%であった。このことは、キャンプのイメージが良かったという平均 74.2%とかなり近似値であった。

社会人基礎力の評価項目の 3 要素からは、キャンプ実習は前に踏み出す力とチームで働く力の育成に効果的であると推測され、養える人間力として、主体性、働きかけ、実行力、発進力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロールなどが挙げられる。これは、他者との関わりで養われる能力がほとんどであり、学内キャンプ実習の効果は、特別活動のねらいと正に合致していると言える。

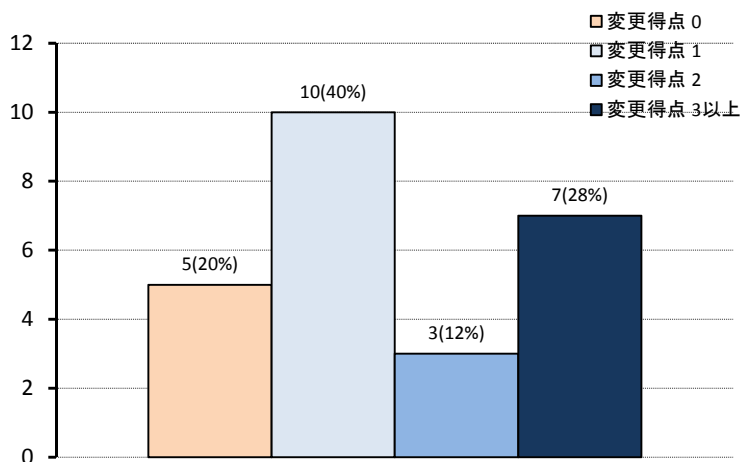


図25: 考え抜く力の変更得点及び人数

V. まとめ

1. キャンプ実習以前に不安な気持ちを抱えていた学生全員が、実施後はその気持ちを打ち消せていた。
2. 学内キャンプ実習でも、96%の学生がその目的達成を感じていた。
3. 開発したカリキュラムやアクティビティプログラムは学習教材に有効であった。
4. 自然体験を除けば特別活動としての目的である、「望ましい集団活動や体験的な活動を通して、より良い人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治能力の育成を築くとともに、公共の精神を養い、社会性の育成を図る」ことができたと考えられた。
5. アンケート結果と社会人基礎力調査結果は、同様に他者との関わりで養われる能力が向上したと考えられた。また、学内キャンプ実習は、協働して行動することにより人間関係力が向上すると推測された。

以上学内キャンプ実習のカリキュラム開発とその効果について、アンケート結果と社会人基礎力のデータで解明してきたが、実際の自然の豊かな環境で行われているキャンプ実習の効果と比較して、同等な教育効果があることが伺われた。

学力向上の課題を抱え、学校は特別活動の行事の精選を求められている。また一方いじめや生活指導上のトラブルの要因となっている人間関係力の育成も大きな課題で、特別活動の行事の役割は益々重要になってくる。安易に中止を決定するような学力偏重の判断や教員の疲弊からくる雨天対策等の代替えの行事計画も難しくなっているなか、特別活動の重要性を感じるならば、是非とも校内でのキャンプ実習の実施を検討して欲しいものである。

VI. 課題

今回は実際に台風接近という天候不順、不測の事態での学内キャンプ実習について、大学生を対象に実施したが、今後は小中高の学校現場での実施による検証を行いたいと考えている。また、期間も短縮型となったためにストレスのかかり方も違い、そのことによりイメージ等に影響があるのではないかと推測している。よって、実際の自然の中と校内でのストレス反応の測定を行う必要があると考える。

さらに、同一被験者での比較や学習効果、人間関係力を測定する心理尺度等の検討が必要であると考えている。今後継続的に研究データの収集を行い統計的な妥当性を向上したいと考えている。

VII. 参考文献

- 1) 加澤恒雄『教育人間学的視座から見た「特別活動と人間形成」の研究—新しい教育学研究への試み—』大学教育出版.2009
- 2) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別活動編』2008.
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』2008.
- 4) 高旗正人、倉田侃司、編著第2版『新しい特別指導論』2012.ミネルウア書房.
- 5) 山口満、安井一郎、他12名『改訂新版 特別活動と人間形成』2015.学文社.
- 6) 針ヶ谷雅子、山田誠、永吉宏英、他8名『キャンプの国際比較その1—「日本型キャンプ」をさぐる』キャンプ研究.2006.p22-25

- 7) 岡島成行、関智子『自然体感活動の指導者制度導入が農山村の活性化に及ぼす影響—CONE 初級指導者(リーダー)を事例として—』野外教育研究 2006,p.72
- 8) 田中利明、矢部京之助『自然学校における指導補助員の教育効果について』野外研究、2006
- 9) 向後佑香、岡村泰斗『発達段階に応じたキャンプ効果の比較』キャンプ研究.2010.p16-17
- 10) 西島大祐『キャンプ実習に関する意識調査—教員養成大学カリキュラムにおける授業実践を通して』鎌倉女子大学紀要、2009.p79-86
- 11) 加藤義人、杉村英憲、高荷秀久、安田健太、世川望、黒田稔、小泉紀雄『キャンプ実習における学生リーダーの意識変容』日本体育大学紀要.2013.p129-140
- 12) 田井健太郎、熊谷賢哉、宮良俊行、金相勲、元嶋菜美香、谷木龍男、水野哲也『大学における野外実習の効果について(2)—キャンプ実習、マリンスポーツ実習、スキー・スノーボード実習を対象として—』長崎国際大学論 2014.p1-11
- 13) 西道実『社会人基礎力の測定に関する尺度の試み』プール学院大学研究紀要.2011.p217-228